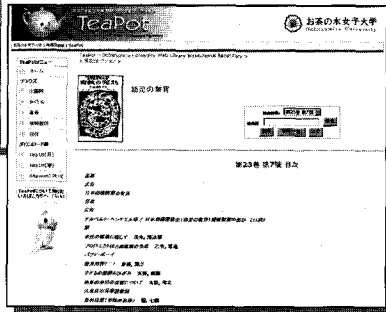


## ▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (5)

### 雑誌としての『幼児の教育』

国吉 栄



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（略称 TeaPot）」にてバックナンバーインターネット公開中。  
URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

『幼児の教育』誌は、その長い歩みの中で何度も転機を迎えて今日に至っているが、今回のインターネット公開は、その中でもおそらく指折りの転機になるであろう。このような折に、小文を書く機会を与えられたことを感謝し、同誌との出合いを振り返りつつ、実際にネット検索をして気づいたことについて述べたいと思う。

私が『幼児の教育』と出会ったのは、今から三十年程前のこと。当時事務補佐のような立場で、ほとんど毎日に在室していたお茶の水女子大学保育学研究室は、時どき『幼児の教育』の編集打ち合わせ会のような場になった。同誌の編集兼発行人であった津守真先生を編集実務の担当者が訪ねてこられ、編集経過のあれこれを活き活きと説明されるのである。普段は院生たちと食事をしながらおしゃべりする古い大きなテーブルで、私も楽しくお二人の話を聞いていた懐かしい思い

出がある。

ちょうどそのころ、「幼児の教育」の前身である『婦人と子ども』復刻の話がもちあがっており、私もその雑務の一端にかかわることになった。頼まれた調べもののために、図書館の書庫の中でほこり臭い文書をめくるのは楽しかった。倉橋惣三文庫や初期の幼稚園遊具を収めた棚など、書庫は宝物に満ちていた。

たしか、「保育学」の講義の中であったと思う。恩師が創刊当時の『婦人と子ども』について、「表紙はハハソとナデシコの絵で」と話したことが、耳に残っていた。「ハハソとナデシコ？」といった何だろうと思っていたが、手に取った深い緑色の地にオレンジと白で「母蘇ははそと撫子なでしこ」が描かれた表紙は、美しく、斬新で、力強かった。まさに当時の熱い思いが結実している表紙であった。

雑誌は、ページの連なりの中に「その時代」の息吹を包み込んでいる。『婦人と子ども』のページを繰る



▲『婦人と子ども』創刊号表紙  
1901年1月発行

につれて、私は同誌のもつ雑誌としての力を強く認識するようになっていった。そこには、後の時代に名前を付けて区分されることになる前の、「その時代」の生の姿があった。『婦人と子ども』は、単体としての論文や記事を、時代の息吹の中で読むことの醍醐味を私に教えてくれた。

ネットで『幼児の教育』を読むことができる時代がきた。「ハハソとナデシコ」の表紙も、今では思い

立ったときに、居ながらにして見る事ができる。

しかし、雑誌としての『婦人と子ども』の魅力を満喫した私にとっては、ネット上では雑誌としての総体を感じられないのが正直のところもどかしい。それぞれの号が、表紙は表紙だけ、目次は目次だけ、個々の見出しは個々の見出しの内容だけからなる多くの独立したファイルから成り立っているために、たとえ同じ号に掲載された記事であっても、一つ読み終えるたびに、いったん目次に戻ってクリックし直す作業が必要になる。そのため、関心や思考が、その都度ぶつんぶつんと切れてしまうのである。

学術誌をネット上で配信するには論文ごとに区切って整理することが通例であろうし、そのほうが利用者にも便利であろう。また著作権の問題などをクリアするにも都合がよいかもしれない。しかし『婦人と子ども』(『幼児の教育』)は、本来、論文の集合からなる通常の学術誌とは少し距離を置いたところに、その特

質があるのではないだろうか。

たとえば『婦人と子ども』の最初の編集者、東基吉が書いたものを検索してみよう。彼はいかにも草創期の編集者らしく、いくつもの筆名を使い分け、八面六臂<sup>はちめんろく</sup>の活躍をした。はつきりわかるだけでも、本名のほかに、「牧羊」「東牧羊」「やまとの翁」「ひむかし」「撃水生」「子ども欄記者」、さらには無署名で、自在に文章を書いている。こうしたことは雑誌ならではのことであり、号ごとにページを繰れば読者には自然にわかってくることである。逆に言えば、そうしなればわからないことでもあるから、検索で彼の全体像を把握するのはなかなか困難なのである。彼の筆名のうち、無署名記事は当然としても、現時点での掲載方法では、「撃水生」や「子ども欄記者」では検索できなかった。

従って、「私は家に居て、夜も行き昼も行きますが、夫<sup>そと</sup>でも外へは行きません、あてゝ、こらん」などと

いう「考へ物」を出したあとに、「皆さん！ 月日のたつのは、早いもので、今年も、もう、これきりで暮れることになりました。此雑誌も、来年は年一つを重ねて、第四年になります。そこで、ますく此子ども欄を面白くして行かうと思ひます。おとぎ話も、室内のお遊びも、面白いのを沢山のせる事にしませうし、考へ物も、だんくと甘い<sup>うま</sup>のを出しませうし其他いろいろく学問のお話や、細工物のしかたなども入れて行くことにしませう」（「考へ物（子ども）」、第三卷第十二号、一九〇三年十二月発行、二十頁）などと語る「子ども欄記者」の文書は抽出できない。

東基吉に関連して「和歌子」という著者も検索してみた。ところが「和歌子」での検索では、重要な記事が出てこない。全ページをサイトアップしたわけではないのかと思つたが、巻号で検索してみると目次のページのいくつかの文書名の固まりの中にそれらはあつた。「幼児の汽車遊び」（第三卷第七号、一九〇三

年七月発行、四十八頁〜五十二頁）「兵隊こっこ」（同年八月発行、五十六頁〜五十八頁）の二編である。ともに幼稚園における子どもの自由な遊びを描いた貴重な保育記録であるが、なぜこれほど長文の原稿が著者名では検索できないのか。理由は、それが「雑録」欄に掲載された記事だったからである。先に検索できなかった「撃水生」も「雑録」欄の掲載であつた。

「婦人と子ども」の「雑録」は、複数の著者による複数の記事から成るページ数の多い欄であるが、現在の提示の方法では著者名で検索することができない。一方、それ以外の欄は、和歌一首でさえ単独にファイル化され、著者名で検索できるようになっている。「雑録」のみ、こうしてひとまとめにされているのはなぜであろうか。それは、技術的な問題というより、学術誌電子化の常道として、「雑録」は文字どおり雑報として処理されたからではないかと推測する。

しかし『婦人と子ども』にとつて、「雑録」は単なる雑報ではない。東基吉は、第三巻第六号（一九〇三年

六月発行）から「雑録」欄に、「先般女子高師、附属幼稚園で保育要項を定めると同時に、実施すべき遊嬉の種類も決めたのである」と前書きして、「幼稚園の遊嬉」と題する記事の連載を始めた。三歳児の「一列行進」から五歳児の「鑽」まで計二十五種の「実施すべき遊嬉」を、振り付け（動作）や曲名とともに三回連載で紹介している。「和歌子」氏の「幼児の汽車遊び」と「兵隊ごっこ」は、その二回目からこれらと並んで掲載された記事であった。

「幼児の汽車遊び」の保育室は、保育史上の常識とは異なり、机や椅子が整然と並ぶ、固定的な空間ではない。そこにはさまざまな遊びが生み出される広がりがあり、椅子も遊具として自由に使われている。当時型どおりに用いられていたとされる恩物も、自発的な遊びの中で、変幻自在に石炭や切符と化している。自然

発生的に始まった遊びが、クラス中を巻き込んで二時間も続いている。

「兵隊ごっこ」では、日露戦争前夜の時代の空気を吸いながら、子どもたちがたくましく生活している。倒れ伏した子どものそばで、二、三人が棒で掘るさまをし、抱き起こして、何かを飲ませているのは、前年に起きた八甲田山における悲惨な雪中行軍である。椅子の上にはすました顔で正座している子どもを下から手を合わせ拝んでいるのは「招魂社に祭ッタンデス」。

「遊嬉」の模範教材と、自発的に生まれた遊びの記録が、啓蒙的な雑誌の中に、同時に、同列に、存在している。東基吉はなぜこうした編集をしたのか。彼はなぜこれらを「雑録」として掲載したのか。彼にとつて「雑録」とは何か。これらは彼の遊び論にどう関係しているのか。「雑録」一つとっても興味は尽きない。

「幼児の教育」は、その歴史的役割の重要性からネット公開されることは、大いに意味があると思う。しか

し、論文の集積誌とは異なる『幼児の教育』から、検索しやすい論考だけが、個々単体の情報として、いわば孫引きのように切り取られ続けると、学問も保育もやせてしまうのではないか。

『幼児の教育』に限らず、ネット検索の利便性は極めて高く、私自身もその恩恵を受ける身であるが、既存の検索機能からだけでは調べられないものもある。しかし、そこにこそ、かけがえのない同誌の魅力があるともいえる。各号のファイルを一つずつのぞいていくと、思わぬ記事に出合う（「ハハソとナデシコ」の表



紙についても、実は謎の文章があるのです。ぜひ独自の検索方法を編み出して、通常の検索の網にかかりにくい同誌の豊かさを味わってほしいと思う。

今回検索を試みたのは、私がかつて親しんだ古い時代の『婦人と子ども』のみである。後代の、あるいは現在の『幼児の教育』を検索するなら、また別の考えを抱くかもしれない。しかし、その変遷のありようも含め、『幼児の教育』のひとすじの確かな連なりは、時代の息吹を包み込む雑誌であるがゆえに、広く日本の文化・社会史においても注目されるに値する。いつの日か必ず、保育界の外から『幼児の教育』が「発見」されるときが来るであろう。そのとき、保育という営みの意味と重さも、外の世界から「発見」されるのではないか。ネット化がそのよい機会になることを願っている。

（彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師）